

# 「殺人」と「食人」を見る宿業の目

張

偉

「殺人」と「食人」は従来日本文学に追究された課題であるが、特に戦争を体験した日本戦後作家の作品は追究が深い。

「戦争の本質が殺人であるという冷酷な事実と、その殺しあいに参加した人間が生き延びるために人肉を食うという冷酷な事実とは、やはり区別されねばならない」という言葉を述べた三好行雄の『野火』論は今まで戦後文字のなかでのその問題についての追究の一つの到達点を示すと思う。本論はそれを踏まえて、『俘虜記』（『文学界』昭和二十三年二月、後に「捉まるまで」と改題）、『野火』、『ひかりごけ』に描かれた「殺人」と「食人」の問題を親鸞の視座から見てその深意を追究してみたい。

上

『俘虜記』『野火』『殺人』と「食人」の問題をめぐる

一 『俘虜記』のエピグラフ

『俘虜記』（「捉まるまで」）の扉を開けると、すぐに読者の目に闖入してくるのはエピグラフになった親鸞の言葉である。

「わがごころのよくてころさぬにはあらず」

歎異抄

大岡昇平の小説はふんだんにエピグラフがつけられていると言われる。例えば、

「たとひわれ死のかげの谷を歩むとも」（ダビデ——『野火』）

「ドルジェル伯爵夫人のような心の動きは時代おくれであろうか」（ラディゲ——『武威野夫人』）

「覚えていてください。私の名はピア、／シエナで生まれ、マレンマで死にました」(『神曲』のラテン語――

『花影』

……

全本の『俘虜記』の十三章の連作の多くにも、さまざまなエピグラフがつけられている。エピグラフの使用は、欧米にはこの伝統が強固で、大岡昇平の文字に大きな影響を与えたスタンダールもうまくエピグラフを使う作家として知られている。そのように見ると、『俘虜記』のエピグラフはただ一つの異質的なものだと言えよう。この異質なところにこそ、欧米の文学や思想の影響を受けて合理的な、明晰な理性によって特徴づけられた大岡昇平のもう一層の閃光が見えると思う。

『歎異抄』は、日本の浄土真宗の開祖親鸞の面授弟子唯円房の著書、親鸞滅後の異端を嘆いた書である。引用されたのは、親鸞の宿業観を表わす第十三章の言葉で、唯円房と師親鸞と、殺人の問題をめぐる対話のなかから出ている。

「あるとき「唯円房はわがいうことを信ずるか」と、おおせのそうらいのあいだ、「さんぞうろう」と、もうしそうらいしかば、「いわんことだがうまじきか」と、かさねておおせのそうらいのあいだ、つつしんで領状もうしてそうらいしかば、「たとえば、ひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべし」と、おおせそうらいしとき、「おおせにてはそうらいども、一人もこの身の器量にては、ころしつべしとも、おぼえずそうろう」と、もう

「殺人」と「食人」を見る宿業の目

してそうらしいしかば、「さてはいかに親鸞がいうことをたがうまじきとはいうぞ」と。「これにしてしるべし。なにごともしころにまかせたることならば、往生のため千人ころせといわんに、すなわちころすべし。しかれども、一人にてもかないぬべき業縁なきによりて、害せざるなり。わがころのよくて、ころさぬにはあらず。また害せじとおもうとも、百人千人をころすこともあるべし」と、おおせのそうらしいは、われらが、ころのよきをばよしとおもい、あしきことをばあしとおもいて、願の不思議にてたすけたまうということをしらざることを、おおせのそうらしいなり。」<sup>2)</sup>

すなわち、善の宿業には善心が現れ、悪の宿業には悪心現れて、善なる行為、悪なる行為、ことごとく我ら人間の意識にはまったく分らない。宿業にもよおされて善心悪心が起こる。とにかく何か知らぬが偶然に起こる。偶然に起こることが宿業の目によって見つめられている。

## 二 『俘虜記』と『野火』の「殺人」

まず、『俘虜記』の出来事から見てみよう。

語り手の「私」はマラリアを病んで撤退する軍隊から見捨てられ、ミンドロ島南方の山中を彷徨していた。自分を駆り立てる米兵が目の前に現れても、決して打つまいと彼は決意している。生涯の最後の時を人間の血でけがし

たくないという決意である。そして、突然米兵と遭遇する。米兵は彼に気づいていない。無防備の敵を撃つのはたやすかったが、彼は撃たなかった。しかし、手は自然に動いて、銃の安全装置を外していた。その後、彼の意識には空白な部分がある。そして、米兵が確実な歩速で近づいてきたとき、不意に、右手山上の陣地で機銃の音がおこった。米兵は銃声のほうに向きを変えて、歩み去った。

その空白のところに、一つ大きな疑問として残された。

「なぜ殺さなかったか？」

それは、作品そのものによって執拗に追究されて行く。またその空白は、作品を理解するキーワードとして皆さんの論者たちによって言葉を持って埋めようとしている。まず、作中の「私」はいろんな解答を試みてみる。

「ヒューマニステックな人類愛」、「米兵の姿に見られる美に対する感動」、「血に対する動物的な嫌悪」などのさまざまな測鉛が持ち出され、空白に内包された心理の屈折が綿密に計量される。しかし、いかなる視角を持ってしても、答えらしい答えは出てこずに、空白を埋める実質はついに捕捉されなかった。最後にし興はいい加減に「父親の感情」である一種の「自然」というところにとどまった。またほかの作品（「タクロバンの雨」）では「神の声」によって補充している。そのような表層の意味で「私」によって認定された言葉は、多くの論者に正直に受け入れられ、それを作品の思考の到達点だと考えられている。例えば吉田熙生の論である。

「大岡氏はこの命題を検討して、次々に「人類愛」その他の無用の観念を剥き落としていき、「父親の感情」という一種の「自然」を得る。そして一方では「無稽の観念」たる「神」を捨てることができず、逆に「神」にかか

わりながらその「神学に含まれた自己愛」を警戒することをやめない（「タクロバンの雨」）。しかし「神」は後の『野火』まで保留され、『俘虜記』の結論は間だ仮定の域を出ない。我々は結論よりむしろ「自然」と「神」という二つの極の間を往復する一精神の運動を見るのである。<sup>3)</sup>

すなわち、この論によれば、『俘虜記』は「自然」と「神」の両極に限定されていると言えよう。しかし、そのように「私」の語りのレベルに即していいのであろうか。実は、「父親の愛」とか、「神」とかという枠をつぶす要素は作品そのものの中に用意されている。具体的に作品の言葉を吟味してみよう。

「父親の感情が私に撃つことを禁じたという仮定は、その時実際それを感じた記憶が少しもないにもかかわらず、それが私の映像の記憶に残るある色合いとその後私を訪れた一つの観念を説明するという理由で、これを信ぜざるを得ないのである。」

「父親の感情」を否定してはいないようであるが、「その時実際それを感じた記憶が少しもない」ことで、せめて、「映像の記憶に残るある色合いとその後私を訪れた一つの観念を説明するという理由」にすぎない。

「あの時私が撃つまいと思っただのは私が「神の声」を聞いたのであり、米兵が迫って、私とその声に従うことができるかできないか不明に立ち到ったとき、別の方面で銃声を起こらせ、米兵をそのほうへ立ち去らせたのは「神の摂理」ではなかったか、という観念である。」（「タクロバンの雨」）

「神の摂理」はここでたしかに否定していないかが、その後につきの言葉が出ている。

「無論この自分勝手な考えは現在私の容認しえるところではない。(中略) この神学はなるほど米兵を撃たなかった私の場合には都合よく当て嵌まるが、他の戦場で繰り返し行なわれているところに少しも該当しない。」(同上) いかにも理由づけられても、どこで解決されたと言うものは何もない。どこでもまだ解決されるに到らなかつたものは執拗に尾を引いて消え去らない。「父親の愛」とか、「神」とか言葉として肯定されるところもあるが、全体的な情緒で見れば、実は否定する相においている。作中の「私」は一所懸命に言葉によってその瞬間の行為に意味づけようとしているが、意味づけられながら、意味そのものへの不信任が文字の裏に埋められていると実感される。理由づけの裏に常に理由づけられないものが内部で沸き続けている。読者に依然として残るのは、事実の素朴な様相と偶然のはかりにくいからくりだけである。むしろ、作品の言葉の背後に、理性によってとらえ切れない行動を無理に言葉によって意味づけようとしている「私」に向けて、「作家」の揶揄的な笑い顔が隠されているとも思える。

つまり、「なぜ殺さなかったか」、この「私」の記憶の空白を埋めるための問題には、作中の「私」も、作品の背後に「私」を操っている「作家」も答えようとしているが、両者の間にはずれがある。決して語りの「私」の言葉のレベルで作品の真意を理解できるとはいえない。そのずれているところは、作品を誤解する落とし穴にもなるが、その問題の答えを求めるように読者を誘う装置にもなっていて、作品の無限の読解の可能性を用意している再生産の場にもなるであろう。本論では、『歎異抄』の言葉に照らしてその答えの可能性の一つを求めてみたい。

## 二 「殺人」とは何か？

『歎異抄』の言葉に照らして見ると、「なぜ殺さなかった」という問いに対する答えは、明白である。すなわち、宿業にもよおされて何か知らぬが偶然に起こる出来事である。

ところが、「偶然」というとらえ方は、先行論文にもたくさん論じられたところである。例えば三好行雄の論である。

『俘虜記』の「私」が、「なぜ撃たなかったか」を執拗に考え続けたように、『野火』の「私」もまた、なぜ撃つたかの問いに答えようとする。彼らはともに、究竟の答えを偶然という無作為の場所でしか発見できない。偶然によって殺したり、殺されたりする。<sup>4)</sup>

しかし、一口に「偶然」といっても、宿業の目に見られる「偶然」と普通の我々人間の目に見られる「偶然」とは内実が違う。普通の「偶然」は何の因果関係もなく、予期せぬ出来事が起こる。宿業の目に見られる「偶然」は、親鸞の言葉「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえ親鸞一人がためなり」といわれるように、「偶然」のなかに永劫の歴史の要素が含まれている。すなわち、個人の一時の偶然な出来事は歴史の中の無数の偶然の連続で



あるが、どの偶然の同来事にも永劫の歴史を内包している。そういう宿業の歴史観をもって見れば、「殺さなかった」という出来事は、一九四五年一月ミンドロ島の山中で一人の日本の兵士の体験であるが、その一瞬の出来事の中には重層的な歴史の要素が含まれている。この一瞬は、異なる時間単位、異なる速度、異なるリズムを持って変化している歴史の中においてとらえなければとらえ切れないのである。

『俘虜記』を読んでいるうちに、「なぜ殺さなかった」という問いに絶えず導かれて「殺さなかった」のはなぜそれほど不思議なのかと気がしてきて、その時、ふと気がついたことであるが、「なぜ殺さなかった」という言葉の「凶」は実は「殺すべきなのに」という「地」によって浮き彫りになっているのだとわかる。ここでしばらく「地」と「凶」とを反転して、なぜ「殺すべきか」すなわち、なぜ殺人のことは、やるべきことになるのかについて検討してみよう。

歴史に目を向けよう。

生物的には、人間は武器を持っていない唯一の脊椎動物で、最も好意に引き合いに出されるものであった。人間は生まれながら爪や蹄、角や牙のような攻撃用の武器を備えていなかった。自然の解決策では、厳しい武器をつけた動物はそれだけ強力な抑制力を持っていることになるのである。この規則によれば、武器が強力であればあるほど、抑制力も強力である。それによると、人間には殺りくにたいする抑制力を非常にわずかしか与えられていないから、人間には自分の同類を、持って生まれた裸の手で殺すことは難しいように自然に規定されたのである。もし人間が文化的に進化してこなかったら、つまり人間が手で自然の武器に変わるものを造り出しうることを発見し

なかったら、そのまま自然の計画に合致していたであろう。

しかし、人間はいつからか分別心が生じて世界を対象化（物化）して、「我」と「他」として自分と他者を対立ものとして見始まる。「我」に対する執着と「他」に対する対立情緒がだんだんと育てられる。宿業の目で見れば、それは人間の無明の初めである。ついに自然の決まりから逸脱することになってしまふ。人間はほかの動物より能力が身に付けた。それは道具を作り、使う能力である。人間は道具を見だし、手を加えた動物になった。そして、手で使う道具に基づいた文化と言葉も発明され、それが人間に地球の占拠者の地位をもたらしした。人間の自然からの分離もそこから来たのであろう。自分が欲求するものを他者にあるとき、あるいは自分に所有するものが他者とられるときに相手と戦うことになる。自然の計画によって、強力な殺人の抑制能力を備えさせなかったが、凶暴な武器を手に入れた人間が対立する他者を殺すのはいい加減な仮定ではないであらう。

人間はとうとう欲求の不満の戦い合う、殺し合う「悪循環」に陥る。戦争は、すなわちこのような悪循環の集団的な現れだと言えます。そして悪循環に陥る人間が自分の行為——貪欲と怒りを他人にぶつけること——を正当化するために、戦争の論理を作った。欲望するものを敵の国から奪い、敵の国に奪われた物を奪還するために、自分の国を「正義」の場において立て、「敵」を「邪悪」の場において暴力で征服するという論理である。

このように見えるならば、人間とは、道具を作る動物という有史以来の固定観念も動揺してくる。人間が実際に作ったのは道具ではなく、「敵」に勝つために使う武器である。数千年の人類歴史は正に優れた武器の開発とその競争の歴史である。民族の盛衰、帝国の興亡、一つの文化はもう一つの分化の瓦礫の中に、自身の繁栄を誇示して

いるのではないか。

『俘虜記』の中に提出された「殺人」の問題は、「悪循環」に陥る日本の一兵士である「私」の一時一地の出来事であるが、それは悠遠の歴史の中の人間の無明の積み重ねとは分かちがたいのである。そればかりでなく、更に当時の地球上の空間での出来事と絡み合っているのである。

「私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方の山中において米軍の俘虜となった。」

この作品の初めの一文の裏にはどれほど読み取るべき内容が潜んでいるであろう。「昭和二十年一月二十五日」の時間に、地球上では、一八八二万人が殺された第二次世界大戦が終わるところである。大規模な集団を単位とする戦争は、地球上で、ヨーロッパ、アジア、太平洋が戦争の焦土したところであった。「ミンドロ島南方の山中」において米軍の俘虜となった「私」は、はっきり兵士として戦場に追い出された者である。そして国と国の敵対関係におかれている。

巨大の社会システムの必要に「兵士」としてその中に編成されることは何を意味しているのか。それについて野間宏の『真空地帯』のなかに適当な言葉がある。すなわち、「真空管」——「人間の要素を取り去られる兵隊」という物である。軍隊という社会システムの装置のなかで、兵隊は人間ではなく、国の戦争に使われる道具であり、敵の国の人間を殺すべき「武器」である。戦場に派遣される目的も明瞭である。敵の国の兵士を殺すのである。「兵士」はそのように訓練されたのである。作品に次のような描写がある。

「私も兵士である。私は敏捷ではなかったけれど、射撃は学生の時実弾射撃で良い成績をとって以来、妙に自信

を持っていた。いかに力を消耗しているとは言え、私はこの私が先に発見し、全身を露出した相手を逸することはない。私の右手は自然に動いて銃の安全装置を外していた。「私」は自己確認するように、「私がやはり兵士の習慣を身に付けていた」と表白した。

「兵士」である限り、肉体の反応まで「銃」を持って殺人することに慣れるように訓練されたことが見える。そして注意すべきなのは、「射撃」や「安全装置をはずす」という動作ははっきり殺人と関係しているが、殺人するときにあるべき重みを感じられずに、何か普通の道具を使っているような気楽な気持ちである。ここで、「銃」という小さい装置が「殺人」という人間の歴史のなかで育てられた行為に大きな影響を与えていることに改めて注目しなければならぬと思う。

「なぜ殺さなかったか」という問いに対する「私」の測鉛のなかにつぎの一つの理由がある。

「むしろこの時人間の血に対する嫌悪をともなった私の経験に照らしてみれば、私はここに一種の動物的な反応しか見出すことはできない。」この言葉の中に一つの概念的な錯誤が含まれているのではないか。「人間の血に対する嫌悪」は「動物的な反応」ではなく、それはもっとも文化的な意味を持っている。すなわち、文化の進歩に従い、人間の身体の状態、理想化され秩序化されることになる。血が流れ出る状態は理想化された身体状態に対して違和感が感じられ、正常な身体の秩序が壊される脅威感を読み取ることになる。それは人間の表層文化の底に潜在的に育てられた殺人を抑制する力だとも言える。

しかし、「銃」はその抑制力を排除してしまう。「銃」この現代的な武器は、他人を殺すときの空間距離を増大す

るが、それだけで殺人するときの心理的な距離を取り除いてしまう。なぜなら、殺人するとき直面しなければならぬ同類の宥しを乞うシグナルや苦痛に満ちたあがきを見ることをしなくても済むからである。作中の「私」は「人間の血に対する嫌悪」という測鉛をいろいろ否定しているが、その否定する理由に最も肝心の要素の一つを見逃されている。それは、時間である。つまり、手が引き金を引くと瞬間にすべてが既成の事実になり、「嫌悪の情」が生じるまで待てないはずである。血を見るまでにはためらう余裕は実はないのである。それを最も証明できるのは『野火』の殺人の行為である。殺人という行為はたしかに『俘虜記』のなかで中途半端、未完成のままであるが、それは『野火』のなかで完成される。「私は撃った。弾は女の胸にあたってたらしい。」一時の衝動的な怒りだけで、何の躊躇も入る余裕を待たずに発砲した。「空色の薄紗の着物血斑が急に広がり、女は胸に右手を当て、奇妙な回転をして、前に倒れた」ことを見るまでにすでに取り戻すこともできない既成の事実になってしまう。それができるのは、「銃」という装置があるから。

そのような「銃」が「殺人」という行為のなかでの大きな役割を果たすことを逆に証明するのは、『俘虜記』の中の「私」の自殺未遂のことである。現代的な武器、手榴弾と銃が使えなくなったから、「私」が「スイッチの」一押しで電気が消えるように「自分を殺すことはとうとう実現できなかった。

そのような「銃」に対する認識は、『野火』の「私」はある程度もっているようである。例えば、

「すべてはこの銃にかかっていたのを、私は突然了解した。いくら女が不要慎で、私が理由なく山を下りたにしても、もしあの時私の手に銃がなかったら、彼女はただ驚いて逃げ去るだけですんだであろう。」「私」がさらに分

析して、「銃は国が私に持つことを強いたものである。こうして私は国家に有用であると同一程度に、敵にとって危険な人物になったが、私が孤独な敗兵として、国家にとって無意味な存在となった後も、それを持ち続けたというところに、あの無辜の人が死んだ原因がある。」

この反省は銃の役割をよくとらえていると思う。それと同時に、言葉に一種の哀れの情が読み取れる。実は人間が文明の中で功利的で合理的に思考の能力を育てられると同時に、ほかの動物世界で知られていないような形をとった哀れみの感情をも発達させたのである。しかし、戦争を強いられた人間たちは自分の理性を国の教育に服従させるために、その理性は人間の哀れみなどの感情を国に強制しようとした。そして、銃という武器の使用によって、さらに哀れみなんかの情を生じる余裕を抹殺する。人間と銃という存在関係を保つかぎり、「孤独な敗兵」になっても、「国家にとって無意味な存在」となっても、すなわち、形式的に身が社会組織から逸脱しても、国によって命じられた「兵士」という身分から完全に身を抜け出すことができない。その身分は一種の慣性として「人間」と「銃」の間に残り続けている。

このような歴史の背景と時代背景を背負って、「私」は銃を持って、銃の射程に入ってきた無防備の米兵に対面したが、発砲しなかった。それは、たしかに意外で不思議なことだといえる。ここで、もう一度「地」と「凶」と反転して、「なぜ殺さなかった」という問いを「凶」として考察してみよう。

「なぜ殺さなかったか」、それについて、作中の「私」はいろんな要素を羅列した。「ヒューマニステイの人類愛」、「既に自分の生命の存続について希望を持っていなかった」、「避けえるならば殺さないという道徳」、「人間の血に

対する嫌悪」「彼の顔の持つ一種美に対する感嘆」「父親の感情」…… これらの要素について、今までの研究は、あるいは「私」の言葉に因んで、部分的に肯定する。例えば前に引用された吉田氏の論である。あるいは全部否定する。例えば三好行雄の論である。（「作者は自ら設定した測鉛をすべて否定した。」「戦争と神」）筆者の目で見れば、三好氏の論は安逸に「私」の言葉の表層の意味にとどまらず、もっと彼の深い気持ちに迫っていると思う。しかしここでは大きな疑問を生じざるを得ない。作品を読む読者として語り手と同じレベルで作品を理解していいか。「私」はその問いの答案を自身の身に付けた文化要素の中から求めようとした。しかしそれを尽くしても答えにはならない。今まで身に付けた文化「観念」を掘り尽くそうとしたが答えはなかなか実質の所へといけない。それで「私」、（その背後で作品を操作している「作家」も）あきらめて、言葉として否定するほかない。羅列された言葉の裏に、それらを羅列したがそれらを持って求めようとするものを捕えきれない「作家」の失望のため息が聞こえてくるようである。

しかしだからといって、そのすべては「無用の観念」として「剥き落としてい」くものだとはいえない。たしかにその理由のどっちでも納得できる理由ではない。どっちでもまったく作用していないともいえない。「殺さなかった」ことは、ただ一瞬の間にそのことは既成の事実になった。偶然だいえばたしかに偶然であるが、その偶然にはどれほどの歴史の沈殿が積み重なっているのであろうか。わずか一瞬の出来事の中には、どれほど数え切れない歴史的な要素が凝集されたのか。

いかにも殺すはずなのに、殺さなかった。兵隊として戦争という社会システムの中に編成され、手に便利な殺人

の武器を持って、まったく無防備の敵の国の人が鉄砲の撃ちやすい射程に入ってくるが、「私」は「撃たなかった」。それはなぜか。いかに追究してもやはり言葉で片づけられない行動である。その中には、何か観念や識理など既成の理性の理解の範囲を超えるものがあるであろう。それは巨大な社会組織の力と対抗できる潜在する要素があるのではないか。それは何ものなのか。作家の大岡昇平はそれをとらえようとしている。

たしかに人間は文明の道を進んできて、「私」がその場で「殺すはず」の心理を育てた文化をも造り出した。その文化の中で、殺人のことは、ある大義名分のもとで、美化され合理化された。しかしそのような文化が人類文化の全部だと言うならば、人間は動物に退化するほかに未来はない。合理主義によって作られたそのような「殺人」の文化は、表層文化だとするならば、人間には「殺人」を抑制するもっと深層的な文化があるはずである。それは何なのか。作家大岡昇平は無意識の中でそれを微かに見えて、そこへの通路を作品の中に用意している。それは『俘虜記』のエピグラフに表わされた親鸞の「本願の救済」の摂理である。今までの研究はその「本願の救済」を普通の「神」と無分別に「神の摂理」として片づけているが、それによって、「神の摂理」よりもう一步深く大岡の作品世界に入る通路を塞がれてしまうといえよう。

たしかに表層の言葉の流れによれば、この『歎異抄』の一節を見つけるのは、「無稽な観念をもって飾るという誘惑に抗しきれなかった」ことの結果で、すなわち、「神の摂理」についての追究の持統である。しかし、親鸞の言葉に内包された真意そのものは、今までの「神の摂理」に対する否定の仕掛けになっている。

エピグラフのこの一文は、『俘虜記』を論じる際に航海の中の暗礁のように扱われ、研究者や評論家たちに慎重



に避けられている。正面からそれを扱うものはほとんどなかった。三好氏が『野火』を論じるとき、ちょっとだけ触れた。

『歎異抄』のこの有名な一説は、人間のあらゆる行為を超世の世の本願で救済する阿弥陀仏の摂理を説いている。<sup>(5)</sup>

「人間のあらゆる行為を」「本願で救済する阿弥陀仏の摂理」というのはその通りである。三好氏は「超世」という言葉を使い、そして「願の不思議にてたすけたまふ」ということを常識の「神」として捕え、「人間の行為を制し、決定的な瞬間に偶然を用意して彼を保護する」「神」として捕えるところに誤解がある。親鸞の「本願」は、普通に言われる「神」——対象化され、人間と天上地下と分離して上からおりて人間を救う神とは根本的なところで異なっている。「本願」は、人間のはからい——「自力」に対して「他力」であるが、「自力」とは対立するものではなく、自力を支え、自力の根源をなす超越的な力である。

人間には最も深層のところに、外的な大きな自然と通底している内的な自然があるはずである。それは親鸞によれば「自然(じねん)」である。しかし合理的主義的な表層文化が発達して以来、深層的な自然の内と外との通路が遮断されてしまう。遮断された内と外の「自然」の出会いを実現するのは、親鸞の宿業観に説かれた「本願の救済」として理解して差し支えないと思う。親鸞によれば、内的な「自然」は「信」であり、外的な「自然」は「願力自然」である。「信」は「願力自然」に出会う「機」である。この「信」はまた合理主義的に考えられるような言葉の分別次元の「信じる」ではなく、それは人間の深い内在する自然(じねん)と通底している層から生じる

「信」である。「信」は孤立的な個人なものではなく、類として歴史伝承の諸要素を内包している。このような親鸞の宿業観ははっきりと消極的な宿命論と峻別して、人間の内に潜在している根元的な力を無視してはいないのである。

具体的に殺人のことでいえば、自分の個人の意志が善なるによって殺さぬのではない。人を殺さぬは、個人の意志、道徳的な理性が自分の行為を決定するのではない。個人意識を超える宿業の力がこれを決定するのである。そういう宿業の操りから人間を救い出す力は願力ほかない。しかし、本願の働きは、「信」に応じて人間にくる。「殺さなかった」瞬間に、「現在している」空間に、「私」は内部に何か生じたに違いない。戦場の事実を体験した大岡昇平はそれをイメージとしてリアルにとらえる。言葉としての確にとらえられないが、その出来事の現時は抹殺されずに、「私の記憶が落ちている」「私の記憶にはない」というふうには「空白」として残されている。その「空白」は、無限の読解の可能性をもたらして、文学の再生産の場になるが、それはエピソードの一文に照らすと、作品の中に宿業の自覚を得て本願の救済に出会う可能性を容納する装置にもなっているといえよう。

ここまで追究してみると、数千年来発展してきた非自然的な欲望的な文化、対立と闘争、殺人を合理化する戦争を生み出した文化と、次元の違う文化は人間にはあるはずである。それは、合理主義的な現代文明に排斥され、無視されたが、人間の深いところに生きつづけている。それは、偶然のような突発な出来事の中に必然的に働いている。『俘虜記』の中で「殺さなかった」が、『野火』のなかで「殺した」という両極の中に揺れている人間の可能性をいい加減せずに苦しく追究している大岡昇平の中には、どのような深い期待をもっているであろうか。「なぜ

殺さなかったか」、既成の観念によってとらえ切れない。「殺さなかった」、「殺した」とは、善か悪か定められない。その既成の言葉によってとらえ切れない困惑を永劫の歴史をもつ宿業に任せる。そこにこそ、既成の文化の中で合理主義によって見い出せない何か人間の新しい可能性が求められるのではないか。それは、「なぜ殺さなかった」というしつこく追究された言葉の底層を厚く積み込んでいるものだと思う。

下

## 野火と『ひかりごけ』の「食人」問題

### 一 『野火』の語り手——「狂人」

『野火』が狂人の手記の手法を取っていることは、先行論文でも注目されている。たとえば手記の回想体の特徴として、三好行雄氏は次のように論じている。

「殺人」と「食人」を見る宿業の目

「まず手記を書く現在の△私▽がいる。そして彼の回想によみがえる戦場にいた過去の△私▽がいる。(中略)手記に定着された△私▽の像は、常に、現在の彼によって眺められた過去の彼である(中略)手記の△私▽は正確には現在の△私▽と過去の△私▽との複合体というべきである。戦場でかつてあったすべての事件、およびそれたちであった主人公の行為や情念や観念の諸相は、手記を書く現在の認識判断のうちにつつまれ、その意識的、無意識的な修正をほどこされる。」<sup>(6)</sup>

ここで述べられるのは、回想体の小説の共有の特徴であるが、『野火』の中では普通の回想の小説のこの特徴を実は淡泊化していることに注目したい。一人称の回想の手記は、必然的に回想する自己は大体回想される自己と同一化せずに過去の自己に対する認識と批判の機能をもつはずである。しかしそういう機能は、三十九章の『野火』の中では、少なくとも三十六章の終わりのところまでにはそんなに働いていないといえる。その前に、二十八章で「この私の欲望が果たして自然であったかどうか、今の私には決定することができない。記憶が欠けているから」というところで、「いま」の「私」は登場している。また、三十六章の終わりのところに「この時私が彼を撃ったかどうか、記憶が欠けている。」という一文によって回想する「私」はもう一度顔を出すが、ほかには、大体行動する私と同一して距離をおいていない。回想される「私」の行為と出来事について回想する「私」の意味づけが基本的に作品の世界から排除される。そして、「この時私が彼を撃ったかどうか、記憶が欠けている。しかし肉はたしかに喰たべなかつた。喰べたなら、覚えているはずである。」という文によって、現在と過去という二つ時間系

の交差が見えてきて、過去の「私」と現在の「私」と距離をおいてきて、回想する「私」は登場してくる。しかし、登場する現在の「私」が実は狂人であることは後の第三十七章の言葉で読者にわかる。手記自体は自由連想の延長として、精神病医者のすすめによって書かれたものである。彼に書かれた神の映像も「罪悪感を補償するために現れるコンプレックス——メシャ・コンプレックス」という診断を与えられている。すなわち、回想する「私」と回想される「私」と同一であり、また語り手が狂人であることによって、語る現在、戦後の価値判断などが戦場におかれた当時に投影することを禁止している。

語り手が狂人であるならば、彼に語られることが、どうして読者に信じられるのか。信じられると主張する論者の三好行雄氏はいろいろ理屈をつけた。しかし、いくら理屈をつけられても、狂人によって語られることは、事実として信じさせるのは無理である。それについて、奥野健男氏に、「生かじりの怪し気な神学を適用し、それを得々として、ふりまわしている……必然性の感じられないロマネスク」という論がある。それはうなずけないが、その批判の批判としての三好氏の論、「作者は狂気に犯された人間を作ること、狂気の妄想が狂った人間に対してのみ関わるリアリティを小説のリアリティに巧みに転化していく」という言い方も、納得しにくい。短絡的なところが残されているのである。狂人の証言は法律に効力はないという事実を表れたように、語り手は狂人であるかぎり、正常な認識と批判の機能をもっていない上に、正常と言える感受性をもっていないのである。

しかし、事実として、この作品の世界では牢固なリアリティを保証しているのである。それは『野火』を読んだ読者に共感されることである。それはなぜであろうか。狂人の感覚と作品の世界のリアリティの間の回路はどこに

あるのか。作者は狂人を作ることについて次のように述べている。「狂人とても我々とそう違った精神構造をもっているわけではな、むしろ我々より論理的であることがある。」(野火の意図) 我々と狂人と共通な精神構造をもっているのはどういう場合であろうか。考えてみると、形而下的なものではないか。つまり本能の次元で肉体の感覚次元である。一度生のどん底に落ちて、一切の形而上的なものが解体された体験をもっている戦場の体験者である作者自身の肉体的な体験こそ、『野火』の作品内で「狂気の妄想が狂った人間に対してのみ関わるリアリティを小説のリアリティに巧みに転化していく」回路である。

『野火』は、二重保険——回想される「私」と回想する「私」の同一化することと、狂人の語り手を作ること——によって、正常の世界の理性的な判断や価値付などの介入を防止している。それによって作品の世界は形而上的な認識の世界から切り放されて、忠実に形而下的な感覚の世界を保っている。であるから、『野火』は作家の自身の体験によって描かれた狂者の手記でありながら、戦場のリアリティの体験と論理を表わす小説になるのが可能になる。

## 二 『野火』と『ひかりごけ』の「食人」

『野火』の後半において、餓えに追いつめられた敗兵が食人の行為に直面させられている。

「オルモツクを出発するとき携行した十二日分の食料はすでになかった。付近の部落に住民が遺棄した玉蜀黍そ

の他雑穀も、すぐ喰べつくした。」という一節によって、戦争の非常な現実が、「餓え」という単純な命題に集約される。そこから、飢餓を伴う主人公の生と死の境目の彷徨が始まる。飢餓の中で、幻想と幻聴、奇怪で神秘的観念の屈折、感受性の異常な混乱など狂気の兆候が描かれながら、一人の飢餓に迫られる人間の肉体の真実を如実に伝えていく。「人間はなんでも喰う倍良れるものである。あらゆる草を、どなに渋く固かろうと、虫の喰った跡によって毒草でないと思われかぎり、採って喰べた。」山蛭も「私は喰べてやった」。さらに「一つのみあまり硬直の進んでいない死体を見て、その肉を喰べたいと思った」というようにとうとう人肉を喰べようとすることになる。

従来「食人」の問題は精神的に論じられがちである。実は『野火』に描かれたように、それは最も形而下のもので、「喰べたい」ということには、肉体的な反応が主となっている。肉体の胃袋の欲望があるのである。その極限状態下の肉体の強烈な欲望を前にして、数千年の歴史の中で育てられた文明的なもの——道徳、倫理、規範、禁忌など、一枚の外套のように剥がされて、露出されるのは、赤裸々な肉体次元の動きに過ぎない。こういう次元で人間は狂人と正常人とはほとんど区別できないであろう。例えば、武田泰淳の「ひかりごけ」のなかに描かれた「食人」のことである。食人者である船長は唯一の仲間が餓死した屍体に直面して、自身も飢えた極限に追いつめられるとき、次のような描がかれている。「むらむらと野獣のような気持ちが燃え上がり、狂人の様にそしてトッカリの皮を剥ぐ時の同じ気持ちで、西川君の死体の肉を切り取ってしまいました。」

ここにも『野火』の狂者の語りと作品のリアリティの間の通路が見えるが、この次元に下りると、作品が追究するものは、「戦争による自我の解体を強いられて、人間性そのものの危機」（『三好行雄の語』）という戦争への批判と

いうイデオロギー的なところをも超え、精神次元のものをも超えて、その人間探究を生の最も底、肉体的なところに引き下ろして、もっとも根深いところへと遡ることになる。

### 三 「食人」と「殺人」

「人間を殺すことと、人間の肉を食べること。この二つの行為が、どこか各々の異なった臭気を発散することだけは、感覚的にわかります。」これは『ひかりごけ』のなかの言葉である。

飢餓の極限状況におかれ、『野火』の中の「私」は人肉を喰う。永松と安田という食人組合に合流して、もらった「猿」の肉を食べる。「猿」だと信じて喰ったのではない。永松が日本兵に発砲する場面を後に目撃して「私」は自白したのである。「これが「猿」であった。私はそれを予期していた。」人間の肉を、人間の肉と知って食べる食人の行為である。

そのような「食人」のことを「殺人」のことと関連して、三好氏は次のように論じる。

「殺すことが戦争だとしたら、喰べることは、戦争による自我の解体を強いられて、人間性そのものの危機の象徴である。(中略)戦争の本質が殺人であるという冷酷な事実と、その殺し合いに参加した人間が生き延びるために人肉を喰うという冷酷な事実とは、やはり区別されねばならない。」<sup>9)</sup>  
それについて、『ひかりごけ』のなかには次のように論議がある。



「殺人のほうは二十世紀の今日、極めて平凡で、よく見受けられるが、人肉喰いの方はほとんど地球上から消滅しつつあるから。朝鮮半島における大量殺人は、ついこの間の犯罪である。そのみならず、今後とも地球上のどこかで同様な殺人犯罪が、大規模に発生するであろうという予感にさえ、我々はなれっこになってしまっている。

(中略) 殺人は「文明人」も行ない得るが、人肉喰いは「文明人」の体面にかかわる。」

「殺人」と「食人」、この両者の区別は、よくとらえられているようである。たしかに、戦争による「殺人」は、武器の開発とその競争を重んじる文明の極端までに発展した「成果」であることに對して、「食人」は獸性の現れで、文明から遠ざかる野蠻の行為である。

ところが、両者の間にの必然的な関連を見逃してはいけないと思う。「殺人」と「食人」——この両者が極めて對極的な側面をもちつつ、戦争のなかで不思議に出会い関連する。それはなぜであろうか。まず、「生き延びるために人肉を喰う」という論理はほんとうに成立できるかという疑問を出したい。というのは、「飢餓だから、人肉を喰う」というわけはないから。人間は同類の肉を食べることはそんなに簡単なことではない。文化の進歩に従い、人肉を喰うことは、すでに人間によって生理から心理から拒否されている。東西問わずに多くの文化において、人間の身体は潜在的には最も聖たる象徴なのである。特に仏教文化では、死者は仏縁をもたらすものであり、その死体は当然に一種の侵せない尊嚴を持っているはずである。それは心理でありながら、人間の肉体までにしみ込む感覚でもある。人間の肉を食べることは、吐き気もするほど忌しい行為で、人間ではない歴然たるしるしである。いつの世にも大多数は人肉を拒否することが「文明人の偏見」だといえるほど、命を失うことのほうが、それを食べ

てしまうよりましだと、普通である。飢饉や戦乱の中で、たくさんの人が餓死したが、人肉を喰うことは、より例外であることである。すなわち、普通なら、「食人」の可能性はとも少ないはずである。しかし、そういう「文明の偏見」は、常に「文明」の欲望によって放棄される可能性を伴っている。

例えば、戦争である。一切の文明的な「偏見」も「禁忌」もつぶされてしまう戦場では、銃などの武器をもって簡単に行なわれる大量の殺人の中で、まず、人間の身体がもっている尊厳、聖たる象徴性をつぶしてしまふ。人間が身体に対してもつべき敬畏は大量の殺人の中で麻痺された。同類を殺すことは当たり前のようにしてきた兵士は、「食人」までには、もう一步のことに過ぎない。一九四四年十一月〔『野火』〕、「大東亜戦争酣たり昭和十九年十二月三日」〔『ひかりごけ』〕という両作品の背景の中に、含まれた一千八百八十二万人の死を考えると、最も明白になるであろう。

文明の産物である戦争そのものが、文明の外套を引き裂いた。メビウスの帯の環に陥っている文明の行方は、「野火」も『ひかりごけ』も見せつけさせている。

『野火』の「手」の章で「食人」に直面する「私」の葛藤を描いた。一つの屍体に直面して食べたいと思い、屍体の肉をきり引こうとした右手の首を左手が握る。そして、「汝の右手のなすことを、左の手をして知らしむるなかれ」という聖書の言葉が聞こえてくる。そのあと、村の会堂で彼を呼んだ巨大な声の幻聴を耳にする。「起てよ、いざ起て……」という賛美歌の声が歌った。それは意識の深層にまでに浸透された文明のタブー、「私」のなかに残された文明の残渣と、人肉を食べたい飢えた肉体の野蠻行為との激しい衝突をひき起こす。

「文明」は勝った。

「私は起ちあがった」、「私は起ちあがり屍体から離れた。離れる一步一步につれて、右手を握った左手の指は、一本一本離れていった。中指、薬指、小指と離れて、人差指は親指とともに離れた。」

その衝突は肉体の次元でも起こった。「私」は「猿」の肉が人間の肉だとわかりながら食べたあと、「まだ暖かい桜色の肉の前に、私はただ吐いていた。空の胃袋から黄色い液だけが出た。」

「文明」、肉体の感覚までに浸透して「文明」はどうとう「食人」のことを禁止した。しかし、「文明」は「殺人」のことをそれほど禁止しなかった。最後、「私」は「食人者」永松を銃で殺した。「文明」は許せない食人者を懲らしめる方法は、同じ「文化」に許されるはずもない「殺人」なのであろうか。

#### 四 『野火』の「野火」

『野火』は、狂人の叙述によって語りを狂人のレベルに抑え、飢餓の極限状態の人間の肉体の真実を語っている。作品の最後に、「この精神病院に入った日以来——」から、語られる「私」は語る「私」に変身した。両者は合一する。叙述の文体も現在時になる。しかし変身された「私」は「死者」になる。「なぜ私はまだいるのであろう。人間どもはもう見えないが、声はがやがや聞こえている。私には彼らが見えないが、彼らには私が見え、どうとも勝手に扱うことができる。」

「殺人」と「食人」を見る宿業の目

「死者」に変身することによって、「私」は読者を日常の世界から引き離し、こちら側（読者）と共有する世界と、向こう側の「虚」の世界との実在と空白の境界線の上から、読者に語りかける。そのような「死」の世界に限定された視野の中で世界を切り取ることこそ、「死者」という身で、自分が「生者」であることを見えなくさせることによって、生者に決してみせないようなことを見せることが可能になる。

「銃をもった墜落天使であったまえの世の私は、人間どもを懲らすつもりで、実は彼らを食べたかったかも知れなかった。野火を見れば、必ずそこに人間を探しに行った私の秘密の願望は、そこにあったかも知れなかった。」

野火の燃えるところには、野火を炊く人間がいるはずだという「野火」の章に描かれた野火に隠されている最も陰蔽の秘密もここで暴露される。

作品最後に仮定形の言葉が羅列されている。

「もし私が私の傲慢によって、罪に墮ちようとしたちようどその時、あの不明の襲撃者によって、私の後頭部が撃たれたのであるならば――

もし神が私を愛したため、あらかじめその打撃を用意し給うならば――

もし撃ったのが、あの夕日の見える丘で、飢えた私に自分の肉を進めた巨人であるならば――

もし、彼がキリストの変身であるならば――

もし彼が真に、私の一人のために、この比島の山野まで遣わされたのであるならば――神に栄えあれ。」

この「死」の世界の空白の中に「私」によって埋められる言葉は、あくまでも信じられない「虚」のもので、つ

ねにつぶされる危うさに脅かされている。だからこそ、それは、新しい言葉によって置換可能なものである。それについて、三好氏は、「この仮定形の否」<sup>(10)</sup>という形で読み取っているが、ここでは、『俘虜記』のエピグラフに照応して、ほかの言葉で置換してみたい。

それは、人間の裏側を生者の目から見えない部分を見出し出している死者の目である。それは生者でありながら生者の世界から狂者として追い出され、さらに死者に行かなければならない人間が生者の暗闇のどん底から出した呼びかけである。すべての努力が窮して、身に付けたすべての観念や論理などが救いにならない絶望者の嘆き声なのである。しかし、この絶望の声こそ、本願の救済の「機」である。親鸞の「他力」の救済の理論は、すなわち、人間が心身を丸ごと闇に鷲掴みにされてくるとき、浄土へ召喚する本願の声に呼び覚まされるという根本元的な覚醒を生じるところである。そのような「本願の救済」は人間の力を超えるものであるが、決して外から、天から下りてきた救世の主ではなく、それは人間の肉体の苦しみのどん底から生じる救済の渴望と大きな宇宙自然の法との出会うところに出てくる「自然（じねん）」である。このような「本願の救済」は大岡昇平が言葉によってとうとう捕えられなかった。しかし、作品のイメージのなかに、言葉の裏には、そこへの通路を用意されている。それがあるからこそ、大岡昇平の文学の人間探究は、ヨーロッパ合理主義を超えて、東洋文化の深層に通底していると言えよう。

注

- (1) 三好幸雄「戦争と神」〔作品論の試み〕所収 筑摩書房
- (2) 親鸞『歎異抄』〔真宗聖典〕所収 東本願寺
- (3) 吉田熙生『俘虜記』「解説」〔新潮社〕
- (4) 同(1)
- (5) 同(1)
- (6) 同(1)
- (7) 奥野健男「大岡昇平論——シニスムの文学」〔現代作家論〕所収 近代生活社
- (8) 同(1)
- (9) 同(1)
- (10) 同(1)